

---

# 銀の放浪老人

脳好き人間

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀の放浪老人

### 【Nコード】

N8090X

### 【作者名】

脳好き人間

### 【あらすじ】

一人の老人が、世界のため、自分の快適な生活のため、可愛い孫を手に入れるために、世界を放浪する物語。

ほぼ会話オンリー、ほぼ毎朝更新、ほぼほのぼのファンタジー、の  
ほぼ三つを目標に掲げています。ついでに言うと、ほぼ思いつきで  
書いています。クオリティーには自信がありませんが、暇なときの  
暇潰しにでも読んでもらえると嬉しいです。

## プロローグ

「千、いや、千五百くらいですかねえ」

一人の老人が呟いた。

「そろそろ対処しないとバランスが崩れてしまいそうですね。久しぶりに、旅立つとしますか。ええ、まずは服装ですね、いかにも紳士っぽい感じでいきましょう」

そう言うと、老人は黒いスーツを着て、頭にはシルクハットを、顔にはモノクルを被り、ステッキを持った。

「うーむ、これぞ紳士って感じですねえ。名前は、銀次、でいいでしょう。銀は老人の象徴ですからね。ではギルドでの名は、シルバ、にしましょう」

老人は、適当に名前とギルドでの名を考えると、満足気に頷いた。

この世界では、ほとんどの住人が名前を二つ持っている。一つは親から名付けられる名で、もう一つが自分の職業を決めるときにギルドで登録する名だ。

必ずギルドに登録しないといけないわけではないが、ギルドから発

行されるギルドカードは現代でいうキャッシュカードやクレジットカードの働きをしてくれるので、ほとんどのヒトはギルドに登録している。

ギルドカードがないと、いちいちお金を持ち歩かなければならないため、世界を身一つで放浪する予定の老人には絶対に必要なことだ。

「世界はずいぶん便利になりましたね。私が若い頃はギルドなんて無かったのに。誰が考え出したのでしょうか？」

「まあ、とにかくにも、まずはギルドに向かわなくては」

こうして、銀の放浪老人の旅が始まった。

## プロローグ（後書き）

### 登場人物紹介

銀次（約二百五十歳、人間族）

黒いスーツ、シルクハット、銀のステッキ、モノクルという出で立ちで、本人はこれが紳士の正装だと思っている。  
今一番欲しいものは『世界の平和』と『孫』。

## 殺人鬼との邂逅（前書き）

ほのぼの？

会話オンリー？

……あれ？

## 殺人鬼との邂逅

「名は、シルバ、ですね。職業は何ですか？」

「職業、ですか？」

ギルドの従業員に尋ねられ、老人は困ってしまう。

「特にこれといったものが無ければ、適当でいいんですよ。例えば、冒険者、とか？」

老人の様子を見兼ねた従業員は、助け船を出した。

「冒険者！素晴らしい！それに決めます！」

「え、はい。わかりました」

従業員は突然の老人の豹変ぶりに驚きながらも、冷静に対応した。そこは流石プロ、といったところだ。

「はい、手続きは終了しました。こちらがシルバさんのギルドカードです。御受け取り下さい」

「ふむふむ、早いですね、しかし冒険者、ですか。思ってたより俄然やる気が出てきました！」

鼻歌を歌いながら、老人は壁に貼ってある賞金首の手配書を見て、ギルドから去っていった。

「やっぱり殺人鬼ですか。殺人鬼が増えすぎると二百年前みたいになっちゃいますからね。可哀相ですが仕方がありません」

老人は人気の無い森の中で呟いた。

「この近くのはずなんですけど、見つかりませんね。もしもし、殺人鬼さん。いるなら出てきてください。出てきたら飴ちゃんあげますよ」

「なに、それは出てくるしかねえじゃないか」

「ふむ、本当に出てきてくださいましたか。飴ちゃんをどうぞ」

「おう、ありがとな」

バキッ

男は飴を受け取りながら、老人の首にナイフを突き刺した。いや、突き刺したつもりだった。

「な、ナイフが、折れた？」

「今のは、殺そうとしたのですか？それとも、最近流行りの挨拶ですか？」

「殺そうと思ってやったんだよ。今日はまだ誰も殺してないからな。一日一殺が俺のポリシーなんだよ。」

「すみませんが、一週一殺くらいに減らせませんか？煙草の減煙みたいな感じで」

「そんなこと、出来るわけねえだろ！」

叫びながら、男は隠していたナイフを老人に投げ付けた。

「おっとっと、危ない危ない」

老人は持っていたステッキでナイフを弾き、そのまま男の首に突き刺した。

「減煙、いや減殺してくださいなら殺処分するしかないですが、それでも駄目なんですか？」

「一日一殺しねえと、すげえ苦しいんだよ。お前ら人間にはわからねえだろうがな！」

一瞬で首から下が再生した男は、先程弾かれたナイフを拾おうと駆け出した。

だがその努力も虚しく、ステッキで体をバラバラに分解される。いや、分解され続ける。

「はい、最後の一つですよ」

「何が、だ？」

「あなたの命のストックが、ですよ。思ったよりも殺してはいなかったようですね。最近まで殺しを我慢してたのですか？」

「最近までは、な。そのせいで、恋人を殺しちゃったんだ」

「それは可哀相に。今からでも減殺してくださいさるのなら、見逃してあげますよ。殺しを我慢したことのある殺人鬼というものは、珍しいですし」

「いや、もういいんだ。どうせ生きていたって殺しつづけるだけだ

しな。そのステキなステッキで殺してくれよ」

「了解しました。そのステキな駄洒落に敬意を表し、あなたを始末して得た賞金の半分くらいでステキな墓でも建ててあげましょう」

「それはそれではどーも」

老人は苦笑いを浮かべる男の頭にステッキを振り下ろした。

「それにしても、殺しを我慢する殺人鬼、ですか。黒矢少年のことを思い出しますね。彼は今でも正気を保っているのでしょうか？ 気になります、行ってみましょう。お金も手に入りましたし」

## 殺人鬼との邂逅（後書き）

### 登場人物紹介

男（二十歳、殺人鬼族）

ヒトを殺さなければ生きていけないはずの殺人鬼には珍しく、最近まで殺しを我慢していた頑張り者。

色々苦しんだりしてたけど、ステキなステッキで殺され、ステキな墓を建てられた。

好きな食べ物はステーキ。

## 鬼の料理人（前書き）

知り合いが、この世の終わりがきたみたいな表情で言っていました。  
「プリンに、プリン体は含まれていない」

あの言葉には、どんな意味が隠されていたのでしょうか？

## 鬼の料理人

「気配的に、黒矢少年はこの店の中にいると思うのですが、『科学食堂』ですか。なんだかあまり入りたくない店名ですね」

「いらつしやいませ。あれ、もしかして御大老様ですか？」

「はい。大体二百年ぶりですね。しかし、今はその名で呼ばないでください」

「え、じゃあ、なんと呼べばいいんですか？」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次、とお呼び下さい」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん、本日はどのような御用件で？」

「本当に呼ぶとは驚きですね。ただ、黒矢君があの時言つてた約束を守れているか、確かめてみようと思っただけです。まあ、大丈夫そうなので安心しましたよ」

「『正当防衛』以外でヒトを殺さない。ですね。最初の方はきつかったですけど、今はもう大丈夫ですよ。相棒も出来ましたしね」

「相棒とは、奥で何やら怪しい物質を作っている方のことですか？」

「いや、本人いわく、料理ですよ。科学と料理には深い関わりがあるそうです」

「しかし、吸血鬼が料理（？）とは珍しい。それに、かなりの力を感じます。あの方は一体何者なんです？」

「ただの変人ですよ。変態でもあります」

「私は変人でも変態でもない。天才だ！」

「うわっ！」

「おつと危ない。大丈夫ですか、黒矢君？」

「大丈夫ですよお爺さん。気絶しているだけ。あつ、さすらいのステッキ職人銀次さんでしたっけ？」

「全然違いますよ。それにしても、黒矢君が気絶するなんて。貴女は一体何者なんです？」

「ええと、ギルドでの名は、リイレです。ああ、黒矢の知り合いなら名前を覚えておかないといけませんね。吸血鬼の伶俐です」

「伶俐さん、ですか。もしかしてラッドさんの娘さんでは？」

「父を知っているんですか？」

「はい。二百年前の戦争でラッドさんに命を救われたことがあります」

「あのダメ父も誰かの役にたったりしてたんですね。でもステッキ職人さんはどう見ても人間ですよ。失礼します」

「痛い！何をするのですか！」

「いえ、貴重なサンプルとして血液を採取させていただきました。  
銀次さんの皮膚は並のヒトとは比べ物にならない硬さでしたが、流  
石はあの武器職人さんの作った注射器ですね」

「なんで吸血鬼が注射器を使うんですか！」

「だって汚いし……」

「そんな！これは、堪えますね」

「うーん、血を見る限り、異常な点は見つかりませんね、って、な  
っ、泣いている！」

「う、泣いて、なんか、いま、せん。私は、旅人、ですし」

「マジ泣き！ちょっと、黒矢！起きてよ！この状況をなんとかして  
よ！」

「う、うん？」

「し、紳士、たるもの、レディ、には、暴力、ふるえま、せんが、  
君、なら命、ストック、万単位、ありますしね」

ガギッ

「ぐわっ！」

「黒矢！大丈夫？」

「フツ、このナイフが、俺の命を守ってくれたようだぜつ。って、壊れてる！」

「ふむ、命を一つ減らすことも出来ませんでしたね。それにしても、今の攻撃が避けられなかったとは」

「ステッキ職人さん、黒矢は最近一人も殺してないから、ずっと苦しんで気絶寸前なんですよ。そんな黒矢に暴力なんてヒドイッ！」

「なるほど、気絶寸前の苦しみですか。大した精神力です」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん、俺の大切なナイフをどうしてくれるんですか？」

「それに、さっきまでののは嘘泣きなんですか？私を騙すなんて」

「ナイフは弁償しますよ。あと、さっきまでののは嘘泣きです。貴方達を油断させるためでした」

「へー、ちなみにさっきのナイフは『刹那を生きる』で買った物ですよ」

「え、そうなのか？」

「黒矢は黙ってて！」

バキッ！

「それに、さっき黒矢がステッキ職人さんのステッキで突き飛ばされた時に、私のビーカーとスポイトが壊れてしまいました。それも弁償して下さい」

「それは嘘で」

「私を疑うなんて酷い！泣きそうです！」

「……………分かりました。全部あの店で買ってきます」

「ありがとうございます。流石はステッキ職人さん」

「…はあ」

「あの娘さん、いい性格してますね。まあ、あれくらいじゃないと黒矢君の相棒なんて務まりませんよね。それに、あの時本気で泣いてしまったこともバレずに済みましたし。結果オーライ、でしょう」

## 鬼の料理人（後書き）

### 登場人物紹介

黒矢（約二百歳、殺人鬼族）

二百年前の戦争のとき、銀次と正当防衛以外でヒトを殺さない約束して、今だに約束を守っている真面目なヒト。色々あって伶俐と出会い、行動を共にしている。ヒトを殺していないため、常に苦しみに耐えている。そのせいですぐ気絶するし、足元がおぼつかないからよくこける。常連客からはドジすぎる可哀相なやつだと思われる。

伶俐（約二百五十歳、吸血鬼族）

黒矢と行動を共にしているマッドサイエンティスト。実験と研究が一番の楽しみで、興味があるものを見つけると我を忘れてしまう。科学と化学と料理を同じものだと考えている。生涯をかけて叶えたい野望があるらしい。実はかなりの箱入り娘で、黒矢に教えてもらうまで、吸血鬼なのに血の吸い方を知らなくて、血は常に用意されている飲み物だと思っていた。

刹那を生きる！（前書き）

ああ、あの二人を登場させてしまった………

刹那を生きる！

「はあ、ここにはもう来ることはないと思っていましたが、仕方がありませんね。それにしても武器屋の名が『刹那を生きる』だなんて、趣味悪いですね」

キンッ キンッ

「おっと、危ないです。そーいえばこの店員さんは店名以上におかしなヒト達でしたね」

「僕達」

「私達の」

「鉄製紙飛行機を」

「避けるとは」

「お前、ただ」

「者じゃあ」

「無いな」

「それに、私のネーミングセンスを馬鹿にしゃがって。許さねえ。なっ、優平」

「いや、正直俺もあのネーミングセンスはどうかと思ってた」

「あの、すみません。武器を買いに来たんですけど」

「なんだって、じゃ」

「あ、あれだな。」

「いらっしゃ」

「いませー」

「二百年経ってもその喋り方は変わりませんね。ずっとそうなので  
すか？」

「いや、二人だけの時は普通に話しますけど、なあ、刹那？」

「まあね。つーか、あんな喋り方で一日中話してたら疲れちゃうよ。  
てゆうーかあ」

「あなたは誰で」

「したっけ？」

「いえ、以前素敵なステッキを購入した者です」

「あ、私このヒト覚えてる。駄洒落センスが絶望的なヒトだ！」

「なるほど。思い出した。俺達のこと、『あくまで悪魔なんですネ、

でも飽くわ』とか意味不明な言葉を口走ってました」

「あのー、そのことは忘れて下さい。といつかまさか二百年も覚えてるなんて」

「まあ、僕は悪魔だし」

「しだまくあはしたわ、あま」

「この世界はほとんどの種族がヒトって言われてるのに、僕達悪魔だけが魔族とか言われてるし」

「全く酷いよね。私達以外の全ての悪魔がヒトを滅ぼそうとしているといえど、これは明らかに人種差別だわ！」

「あのー、武器を」

「うるさいな、」

「黙ってなよ老人」

「あんたに必要な物なら」

「レジのところに置い」

「てあるよ、あんたは」

「人間の中では最強っ」

「ばいし、特別大サービ」

「スしてやんよ。それに」

「死なねー奴と取引して」

「も意味ねーし、私は若い」

「魂が好みだしな」

「では、頂いておきますけど、やっぱり貴方達は魂とか食べるのですか？」

「超食べますよ。それはそれはこの星の住人の半分くらいは」

「なんですと！」

「いやいやジョークだったの。あたいらは温泉饅頭とか食って生きてるよ」

「魂とか汚そうだし」

「じゃ、元気だな」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん」

「素敵ステッキ職人さん」

「はい。それではまた、優平さん、刹那さん」

「いやはや、三十年分くらいの疲れが一気に溜まりました。もうここには来たくないです。しかし、私、いや、儂、やつぱ、私が買うおとしていた物が既に揃えられているとは、悪魔とは本当に恐ろしい生き物ですね。まあ、あの二人が特別なだけかもしれませんが」

## 刹那を生きる！（後書き）

### 登場人物紹介

刹那（年齢不明、悪魔族）

優平とともに武器職人をやっている。ネーミングセンスは絶望的。ヒトと仲良く（？）するため他の悪魔から敵視されているが、魔族の王の弱みを握っているため、魔族で刹那に逆らえる者は優平しかない。ブラックジョークを愛している。

空霧優平（年齢不明、悪魔族）

刹那と行動を共にしている武器職人。名前の通り優しい（？）性格をしており、気が向いたときは、客を殺そうとする刹那を宥めたりする。刹那のことを大切に思っているが、ネーミングセンスの悪さにはうんざりしている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8090x/>

---

銀の放浪老人

2011年11月4日07時07分発行